
光を貴女に

戒斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光を貴女に

【Zマーク】

Z1095Z

【作者名】

戒斗

【あらすじ】

海は海賊、陸は貴族が支配する世界のお話。

とある成金貴族はすばらしい歌声を持つ少女を飼つておりました。海賊が、少女を盗んで、少女の秘密を知つて、共に冒険。つていう感じのストーリーです。

ある程度話が進んだら、キャラの情報なども書きたいなあと思つています。

まあ、成り行きで書いていくストーリーです。
気が向いたら読んでやってください。

少女（前書き）

またまた思いついちゃったので新作投稿です
がんばります

よろしくお願ひします

少女

「シャンティアを連れて来い」

美しい夕焼けの中、海へ迫り出したバルコニーに佇む一人の男が呟いた。

周りに控えていた数人のメイド達が音も無く一礼して邸の中に引き下がる。

ここはとある大国の海辺にある街。

波と風の音が絶えない海に面した大きな邸。

住んでいるのは成金ものの金持ち貴族と使用人達。

「旦那様、シャンティアを連れて参りました。」

先ほど邸の中に下がつて行つたメイド達が戻ってきた。そして、その後ろには……豪勢に着飾り、両手足と首に枷をはめられ、目隠しで両目を覆われ、終いには鳥籠のような檻に入れられた十代半ばの少女がいた。

「さあ歌え、シャンティア。」

先ほどの男が少女 シャンティアに言った。

その直後、小さな声が辺りに響き渡った。

シャンティアの鼻歌であった。

声すら出していないのに、周りの人間は全員シャンティアの歌に聴き惚れていた。

しかし

「貴様、いい加減に声を出して歌わぬか！貴様はこの私の奴隸なのだぞ。貴様は私に飼われているのだ。言ひことを聞かぬか」

男は納得しなかった。

シャンティアが声を出さないのはいつものこと。しかし、この貴族の男は少女の声が聞きたかったのだ。その為にこの少女をわざわざ買つたのだから。

シャンティアは、主の指図など聞いていないように鼻歌を歌い続けている。

とても小さな音が辺りに流れている。

その音だけでも、男の気を静めるのには十分だった。

歌い続けるシャンティアに男はもう何も言わなかった。

「船長、次の狙いは決まりましたか？」

船長 そう呼ばれた男は地図を見て笑っていた。

ドンッ

「ああ、決まった。次の狙いは、この街にいる成金貴族野郎だ」

その音は地図にナイフが突き立てられた音だった。

「出航だ」

船長が咳き、周りにいる奴らが笑い、船全体に向けて叫ぶ

『野郎共！次の目的地が決まった。・・・・出航だ！』

男が、トランペットのような形をした物に叫んだ瞬間、船全体から

歓声が上がった。

夕日が綺麗だつた空には、もう既に星が煌めいていた。

シャンティアは未だに歌い続けていた

「もう良いシャンティア、下げる。」

鳴り続いていた音がピタリと止み、周囲にいた者達がシャンティアの入れられている檻を引き摺つて、邸の中に運んでいく。

その様子を一瞥し、貴族は笑つた。

声高らかに、笑い続けた。

音（前書き）

急遽書き上げたので、文章が雑かもしませんが、目を瞑つてください。

音

「船長、もうすぐレビアンが見えてきますよ」

レビアン 今回の標的

レアグローブ王国の首都から最も近い海辺の街といふこともあって、貴族共の別荘がわんさかある。

今回はその別荘の中から、良き氣なのを見繕つて盗みに入る。

「ああ、分かっている。野郎共に伝えろ『今夜、海から最も近い邸に（盗みに）入る。得物の準備をしておけ』ってな」

船長と呼ばれた男がそう言い終わると、周囲にいた一人の男がラッパのような伝令機に向かって叫ぶ。

今夜の仕事《遊び》を知らせる声が船中を駆け巡った。

「ここは貴族の邸の最奥。」

その中にあるのは宝石やら、毛皮やら、高価な物ばかり。しかしその中に物ではない者が、檻に入れられた少女が居た。

いつ主からよばれても対応できるようにセッティングをされている。美しく着飾った人形。

十代半ばの少女は、自由もなく暗闇の中でただ一人静かに座っている。

凛と背筋を伸ばし、檻の中に唯一ある豪華な椅子に座つて。

誰もいないこの空間にただ一人。

美しく哀れなその姿を知る者もなく。

「ドルヴァー兄貴、見えて来やしたぜ。」

暁の空の下、一艘の船がレヴィアンに入った。

「うう、船長と呼ばんか」

「いい、・・・・・綺麗な街だ。壊せると悪いと夜が楽しみで
しうがねえ」

この船の船長の名はドルヴァーといいう。

見えて来た街を見ながら微笑を浮かべていてる背の高め若い男。

この船には他にも体格も良く、もう少し年のいった男達もいる。
その中で船長と呼ばれているのだ。恐らく、実力がよっぽど高い
だろう。

「兄貴、今回はどの邸を狙うんですかい？」

先ほど船長のことを見た少年。

彼は十代後半ぐらいだろうか。人なつっこい笑顔を浮かべていてるが、
額にある小さな傷痕が目立つ。

「…………あれだ。あの邸を今回の標的^{ターゲット}にする。まるで入って下さいと言わんばかりの構造じやねえか。海賊をおびき寄せたいのか、ただ単になんにも考えちゃいないのか、どちらにしろ盗られた後のボンボンの受けるショックは大きいだろうな。」

視線を街に向けたまま一つの邸を指差す。

趣味も悪くない立派な邸だが、外觀やら見栄やらを重視しそぎたのだろうか。海に突き出すバルコニーは、ここから入って下さいと言つていいようにしか見えない。

「死角に入つて様子を見るぞ、岩陰に船を入れる。それから甲板に（総員を）集める。今日連れて行くヤツを選ぶ。」

数分後に集まってきた若く屈強な戦士達を見ながらドルヴァアは、今回仕事の成功を確信していた。

「シャンティアをよべ。それから、料理を用意しろ。」

いつもの様に邸のバルコニーには一人の貴族と大勢の使用人達が居た。

「すぐにお連れいたします。料理の方も完成間近ですので少々お待ちください、旦那様。」

使用人の一人、最も年老いているであろう黒い燕尾服に身を包んだ男が、一歩前に出て口を開いた。勿論、恭しく頭を下げる事も忘れずに。

旦那様 そう呼ばれた貴族の男は目の前に広がる海に目を向けて

満足そうに笑った。

血ひの邸が海賊の標的になつてゐることなど知り難い。^{ターゲット}

「兄貴、この音何ですか？」

ドルガアに聞こえてゐるのは波と風の音だけ。

一瞬、何のことが分からず顔をしかめた。

「音？ 何の？」とだ、バルドル。

「わしきつからすーと聞こえてくるんですよ。波とリズムが一緒に分かりにくいくらいんですけど、やつちやな音がね、多分歌だと思つんですけど」

そつ言わると確かに聞こえてくる。小さいけれどリズムを持った歌が。波風の合間に。

「よく気付いたな。こいつは多分^{ターゲット}標的の邸から聞こえてくるんだろ。大方金に物言わせて歌い手でも雇っているんだろうよ。」

ドルヴァアでも気付かなかつた音をバルドルは拾つてきた。それも凄いことだが、さつきまで認識すら出来ていなかつた音を、出所まで分析できるドルヴァアも十分凄い。

「にしても綺麗な音ですね。眠くなつてくるや」

声には出でずドルヴァアは頷いた。小さな音だが、波と上手く調和している。

自然と一体化した音。

貴族が一人、自らの邸のバルコニーで料理をつつきながら、シャンティアの音に耳を傾けていた。

今、この邸が海賊に狙われていて、そう遠くない岩陰から観察されていることには誰一人として気付かない。

を除いて

唯一人

シャンティアを 除いて。

彼女はいつもとは微妙に違う波と風の音で、近くに船が一層あることに、波と風に紛れる音の中から拾つた声でこの邸が海賊に狙われていることに、今までに海賊がこの邸を観察していることに気付いていた。

目隠しをされ、暗闇の中で生活してきた彼女は次第に聴力を特化させていた。

彼女は小さな音で歌を紡ぎながら反響音として帰つてくる自らの音
で海賊の動きを観ていた。

音（後書き）

超聴力ってあつたらいいと思いませんか？

侵入（前書き）

今日はちょっと長いカモです
どうぞ

侵入

「あつ、音が・・・・・・消えた。」

綺麗だったのに。

後に続くこの言葉をバルドルは口の中で転がした。

気付くともうすっかり陽も沈んでしまっている。あの音を紡いでいた人はどんな人なのだろうか。

今日邸に忍び込んだときにもしかしたら見れるかもしない。

そう思うとバルドルにとって今日はいつもの狩りよりも楽しみでしょ
うがなかつた。

さらに時間が経ち、もうすぐ日も変わろうとしている頃、田をギラつかせた男達が邸の電気が全て消える瞬間を見た。

それが合図。

仕事の始まりだ

屈強な男達が武器を抱え、音もなくバルコニー下の崖を登つっていく様はハツキリ言って不気味だ。しかしその様子も唯一の明かりが消えた今となつては見なくてもすむ。

ドルヴァアは男達の先頭を行きながら邸の中にあるであろう財宝の山を想像していた。

そんなこんなで、何事もなくバルコニーに侵入した海賊一味は中から足音が聞こえないのを確認し、針金で扉の鍵を開けた。

ここで役に立つのがバルドルだ。五感が鋭い。耳は良いし手先も器用で侵入時に無駄な殺生をせず、時間を浪費しないためには欠かせない逸材となっていた。

“バルドル、どっちだ？”

侵入した直後にドルヴァアは必ずバルドルに聞く。宝物庫はどこだ？

今回は廊下の突き当たりではなく途中にドアがあり、田の前は壁なので右か左どちらにあるのかという意味だ。

いくら夜であつても、宝物庫の付近には必ずと言つていいほどに警

備の人間がいる。

足音の数が多い方向に宝物庫はある。

それを探し出すのも船では一番耳が良いバルドルの仕事だ。

バルドルは声には出さず向かつて右の方向を指差した。

ドルヴァアの指示で海賊の一団が一つに分かれた。バルドルが見つけたのはあくまで人の多い方向だ。

そちらに多く人員を割いておけば、もしその他の場所に宝物庫があるても敵が少なければ人員は少なくともすむ。

もちろんバルドルとドルヴァアは可能性の大きい、人が多くいる方向へ向かう。

“兄貴、この邸変だ。起きて動いてる人がめちゃくちゃ少ねえ”

壁に隠れて次進む道に人がいか確認しているときにバルドルが呴いた。

“安心しろ”

そななことだらうと思つていた。

この邸に住む貴族の評判を聞く限り、親から受け継いだ貴族という身分名乗っているだけの頭の回らぬ成金野郎だ。

大方、賊になど入られるわけ無いという根拠のない自信を抱えているのである。

それとも、賊のひとなんて思ひつてもしない馬鹿なのか？

“どうして、考えるだけ無駄である。”

バルドルの頭をポンッと軽く叩き人のいない通路を走る。絨毯が敷かれていて、音があまり出ないのは助かる。

“冗談、いじだ。この扉の奥に宝がぎっしりあるぜ”

急にバルドルは止まつた。何の変哲もない扉の前で。

“何故そつ思う？”

普通宝物庫といつのはじつは、扉で鍵も何重にもあるようなものだ。

“きつい鉄の匂いがある。それから、三分の二の向い側にも通路がある。”

“武器とかじゃないのか？それに何故通路があるって分かる？”

普通に誰でも思うだろう。貴族なのだ。王の命令で武器を持ち、戦場に出向くこともあるかもしれない。何であれ、根拠が分からぬ。

“武器庫はさつきあった。通路だと思うのは、絨毯が他の部屋と違つて、扉の直前で切れてないから。それに、扉の作りが微妙に違う。”

言われてみて初めて気付く。確かに絨毯は途切れていないし、扉の

作りも両側に押して開け放てるようになつていて。90度ぐらいしか開かない他の部屋と比べたら確かに違う。それに鉄の匂いがするということはおそらく宝物庫の扉が鉄なのだろう。

“バルドル、中には人は？鍵はどのくらいで開く？”

扉に耳を当ててしばし目を閉じていたバルドルが鍵穴を覗て言う。

“中には動いている人は居ない。鍵も三十秒もしたら開くよ”

そう言いながら、鍵穴に針金を差し込み手応えのある場所を探し始める。その間、他の面子メンツは人が来ないか廊下の両端で見張っている。

力チャ

小さな音を立てて、鍵が開いた。バルドル以外の船員がやると、盛大に音を立ててしまう。

“兄貴、この通路の突き当たりに、扉がある。その横に4人ぐらい警備が立つてる。”

“了解、てめえら、一瞬で仕留める間違つても助けを呼ぶ時間なんて与えるなよ”

廊下の見張りから戻り、後ろに控えていたメンバーに囁き、ドルヴァ達は中に入った。

目の前に続く曲がりくねつた通路。恐らく、邸の周りを囲うようにある隠し通路なのだろう。それにしては大きい気がしないでもないが

洞察力の優れたバルドルの心配など知るものは誰もいない。

一本道の通路を走り、ドルヴァア達は最後の角についた。

死角から様子を窺い4人の警備員と、大きな鉄の扉を確認する。

ドルヴァアは睡眠作用のある煙玉を取り出し、彼らに向かって転がす。煙玉は小さい上に辺りは口クに光も点いていないため薄暗く、運良く警備員に気付かれないまま足下に転がすことが出来た。

小さくとも強力な煙玉。耐性のない人間からしたら耐えられない。その点船の人間は、自分の煙玉は自分で作っているため何度もとなくその煙を浴びている。しかも今回の物は小さいため、少し煙があさまるだけで、簡単に近づくことが出来た。

“縛りあげる、声も出ないようにな。それから、通信用の物を持つていなか、確認しろ。あつたら取り上げておけ”

ドルヴァアは地面に倒れている役に立たない警備員を一警し、そう命じた。

その間にバルドルは鉄の扉の鍵を警備員から押借し、宝物庫を開放した。

中にライトを当てるとい、宝石や、毛皮、アンティークにアクセサリーなど、金田の物が所狭しと並んでいる。

順々に部屋の端から端までライトを当していくと、奥の方にある灰色をした大きな物が照らされた。

灰色っぽい

“何だ、アレ”

バルドルの一言で、他のみんなの注目も誘い、いくつかの光がそれを照らす。

それはきらびやかな洋服に身を包んだ少女だった。
しかし少女は目隠しをされ、両手足と首に枷をはめられた状態で、
鳥籠状の檻に入れられていた。

“女？それも・・・・・ガキ？”

侵入（後書き）

次回もがんばります
評価とかしていただけたら嬉しいです

意志（前書き）

意志

“ 何で・・・・・こんな所に女のガキがいやがるんだ”

鳥籠おじりの中に入っていたのはバルドルと同じくらい・・・・・いや、もう少し若いかもしない。何であれ自由を奪われ、鳥籠おりの中に入る姿はまるで人形だ。

“ バルドル、出してやれ”

呆気に取られて見ているバルドルにドルヴァアが命じる。

最初は狼狽えて見ていたバルドルも慌てて檻の鍵を開けにかかる。

“ 他は宝をあわてて”

さつきまでのバルドルと同じようにつか迷っていた野郎共も我に返つて動き始める。

バルドルは考える。

(さてと、このガキはどうせ貴族の玩具だらうから、少し遠い所に逃がしてやればどうにかなるだろ。……しかし胸くそ悪い趣味だな、貴族野郎。こんなガキの自由を奪つて楽しいのか？)

抑えられない怒りがドルヴァアの中に沸々と沸き上がつてくる。

“ 大丈夫か？ちょっと待つててな。すぐに出してやるから”

バルドルは彼女の手や足、首にまで付けられていた枷を外しにかか

つて いる。

パサツ

最後に残つていた彼女の自由を奪つもの。目を覆つていた布を解いた。

ドルヴァはいつの間にか檻の近くまで行つてその光景を眺めていた。

“ 安心して、もう大丈夫だから ”

バルドルの声が聞こえる。さつきから彼女を安心させようとしいるのか、しきりに声をかけている。

しかし、どこか妙だ。

彼女は、反応を表さない。

自分を縛つていた鎖が消えても、視界が開けても、檻の中から救い出されても、言葉も発さず、自ら動こつとさえしない。

普通、こういう場合は、ドルヴァ 達海賊を恐れるか、助けて貰つたことを感謝するかどちらかではないだろうか。

しかし彼女は何も行動を起こさない。

ただ、鳥籠の中^{おり}で椅子に座つているだけ。

背筋を伸ばし、動かず、ただ凜としていた。

“ 外れたよ。もう大丈夫だから、出でおいで ”

一向に鳥籠の外に出てこようとしている彼女にバルドルが声をかける。

しかし彼女はバルドルの方さえ見ず、反応も示さない。

バルドルも諦めたのか、鳥籠の扉を開けたままもう何も言わなくなってしまった。

“バルドル、お前も他の宝をあさつていの”

この女、助けて貰ったバルドルのことを無視しやがって……
生意氣な。

身動き一つしないとかどうなつてんだよ。

助けて欲しくなかつたとか？

鳥籠の中が氣に入つてるとか？

あー、もうなんか全部むかつく。

鳥籠を見ながら、無表情でドルヴァアが考えていたことを知る由はない。

“おいガキ、何でてめえみてえな奴がこんな所にいんだ？”

…………無視とは良い度胸じゃねえか

「あなた達は海賊」

……喋つた？

「見つかる事を恐れている。」

宝をあさつていた野郎どもも鳥籠の周りに集まってきた。
さつきまで一切喋らうとも、動こうともしなかったのだ、当然皆驚きを露わにしている。

“ガキ、何が言いたい？”

「だから、そんなに小声で会話をしている」

“だから何だ？”

「早く逃げる。」

“・・・・・は？”

「IJの邸の主に、お前達が侵入したことが伝えられた。」

“なつ・・・・・ビういう事だ？何でお前がそんなことを知っている。”

「耳が良いのだろう？バルドルとやら。聞こえぬか？邸の中の狂つた風の音が、足の音が。」

つまりこのガキは耳から得た情報で俺等に危険を教えているというのか？

「……聞こえぬか、まあよい。ともかく早く逃げる。」

バルドルでも拾えなかつた音を意図も容易く拾つていたこのガキには驚いた。

しかし

“おまえはどうするんだ？今の言い方だと、この鳥籠 おり に残

ると行つていいゆつに聞こえるんだが”

「左様。元々助けを乞つた覚えはない。……私はこの邸に売られたのだ。他に行く宛もなければ、生きてゆく自信もない。はよつ行け。

」

淡々と吐き出された言葉は、田の前の幼い少女から発せられたにしてはあまりにも残酷すぎる。

“俺等が暫く面倒を見てやると云つてもか?”

“兄貴?...どうもりですか?”

基本俺等海賊の船に女は禁物。バルドルが小声ながらも声を荒げた。

“じゃあバルドル、お前はここにこのガキを置いて行けつて云つのか?”

静かな口調だ。けれど、有無を言わせない、少なからず怒氣を含んだ声だった。

“……そんなつもりじゃ、”

“じゃあどうじかって云つんだ?”

沈黙。
しかしそれはすぐ口に破られる。

「少し待て、私の意志を無視するでない。私はここにある。この場を離れるつもりはない。……もう一度言つ、早く行け。捕

まりたくなれば、逃げる。もつ時間がないぞ」

渦中の少女の手によつて。

“悪いが聞けねーな。・・・・・野郎ども、船長命令だ。あのガキを盗め。”

最高の獲物を見つけたのか如く、ドルヴァアの唇の端は吊り上がりつていた。

けど、ドルヴァアはこの時少女が呟いた言葉を聞き取れていなかつた。最後に言つた、最も重要な言葉。

少女は言つた。もう時間がない・・・・・と。

「そこまでだーーよくも我が邸に乗り込んで好き勝手にしてくれたな賊共！――」

意志（後書き）

は～い、言い訳をしまっす

私は今受験生なんですが、テストが三連続であるんです。
トホホ

また更新遅くなることあるかもんですけど、見捨てないでください
よろしくお願ひします

怒り（前書き）

前回の投稿からあがめがちでありますので、
何この短セッ！？

長く書けない・・・・・・

怒り

「そこまでだ……よくも我が邸に乗り込んで好き勝手にしてくれたな賊共……！」

あーあ、せっかく上手くいってたのに余計な邪魔が来た。

……しかも、俺は今ちよつびいの胸ぐそ悪い貴族野郎に対しても激しく怒つてんだよ。

「…………てめえか？」

怒りに震える声。

微かに聞き取れるようなか細い声だった。

貴族野郎のトニセヒツキヘヘリコの小さな小さな声。

「何だ？ 海賊。私に尋ねたいことでもあるの…………」

「このガキをこんな薄暗い所に閉じ込めたらのはてめえか？……！」

貴族の言葉はドルヴァアの怒りにまかせて叫んだ声によつてかき消された。

「それがどうしたところのだ……シャンティアは私が買ったのだ。
どうしようとも私の自由である。」

「…………まれ…………黙れよ…………」

横に沢山の兵士を引き連れているためか、貴族の言葉に焦りや恐怖はない。

己らの勝利を疑つていない。

「シャンティアは私が飼っているのだ。生かすも殺すも私次第なのだ。そう思わんか？賊共よ。」

「黙れっつってんだろ？が！！」

広く鎖されていた空間に張りつめた声が響く。

「楽しいのかよ？あ、？こんなガキの生活奪つて楽しいのかよ？」

ドルヴァアの声に、叫びに、空気が震えた。
ピリピリとした怒りが肌から伝わってくる。

それでも、後ろに兵隊共を並ばせた貴族野郎は余裕な態度を崩さない。

アーティストが鶴鳴のアート・コレクション。

しかし

いきなり奴は笑い出した。

狂つたように、嘲笑うように、心底おかしそうに。

「何がおかしい？」

ドルヴァアが尋ねても貴族は笑い続ける。

「てめえ・・・・・いい加減にしゃがれ！」

「シャンティアは外の世界では生きられぬ。だから私が飼つてやつているのだ。」

「そんなこと、てめえが決める」とじやねえ。」

相変わらず貴族野郎の発言は気に食わねえ

何処で生きるかを決めるのは他人じゃねえ、
自分自身だ。てめえ

「不愉快だ。賊如きがこの私に暴言を吐くなど・・・・・・やれ！」

身分のある人間はこれだから嫌だ。

は呑気にそんなことを考えていた。

「いくぞ！ てめえら。貴族野郎の鼻つ柱をへし折つてやれ！」

才才才才才才才！

ドルヴァの宣言に海賊達も各自の武器を掲げて騎士の群れの中に飛

び
込
ん
で
い
く。

孤独（前書き）

長らくお待たせして申し訳ありませんでした（待つていてくれた人がいるのかさえもう謎です）　いると信じて投稿します。

孤独

今、私の田の前で起立っているとはなんだ？

私はこの海賊共に助けをこうた覚えはない。

籠の中の鳥であることに不満があるわけではない。

第一、私にとってこの籠の中が全てなのだ。満足しているわけではないが、他の居場所を知らないのだ。不満とは、何かを羨むことで生まれる感情であろう。

だから私は

不満を感じることすら出来ない。

私は世界を知らない。

独りでは生きていいくことが出来ない。

八、九、十人目・・・・・ひとつ。

貴族野郎が個人で所有しているらしい部隊だからか、兵隊さん方が増えていく気配はない。

それでも、数が多い。確実に減つていつてはいるが段々と疲れてきた。

・・・・・しかも、武器を構えるでもなく笑つてこの状況を見下ろしている貴族野郎が胸くそ悪くて仕方がねえ。
奴は、このシャンティアとかいうガキに相当こ執心のようだ。
暗えからよくなは分からんが、こんなガキの何処に執着してんだかこの口リコン野郎は。

といふ風なことをドルヴァアが兵隊共と刃を交えている間に考えていたことを知つてゐる者は居ないということだ。

「船長おおおおおおーーー」無事ですかーー？」

ドルヴァアが心の中で愚痴を吐きまくつていたときだ、邸に侵入した

ときに分かれた味方の一部隊が騒ぎ聞きつけ、兵隊共を蹴散らしてやつて來た。

——勝つた！！——

この兵隊共は数だけでさほど強くもない。どうせ、貴族の自慢のために作られた軍隊だろう。量が多いのは面倒だが、後ろと前を取つてしまえばこいつのモノ。挟み込んで一気に攻め落とせる。

「聞け！野郎ども！敵は数だけの見栄張り軍団だ！ぶつ潰して堂々と宝を盗むぞ！」

『アイアイ・キャプテン！…』

ドルヴァアの宣言に海賊達の声が高く響いた。

ドルヴァアの宣言はその場にはとても効果的だった。

まず海賊達の戦意をそそり、貴族の感情に火をつけ、ろくに戦に出たこともない軍人共の恐怖をあおった。

ただ独り、この言葉に對して微塵も動かなかつたのは渦中の少女。
檻の中に静かに佇む歌い手シャンティアと呼ばれた彼女、だけだつた。

つたく、ここにこの軍人共はどんな養育を受けてんだか。
こんなへつぴり腰で向かつて来たつて斬られるだけだつ一つのに。

「ドルヴァ兄貴、道あけるんで野郎の下まで行ってくだせえ。なんか面倒になつてきりまいか。」

開いたのはバルドルだつた。

長い柄の両端にはそれぞれ、刃と重りが付いており戈でありながら鈍器としての使用も出来る。

く、扱いにくいのが難点である。
そんな武器を事も無げに振り回している。

・・・・・・・・頼めるか「

背後にいるハルト川に視線を送れば「許を不適に歪める」

・開けやしたぜ。」

戒めの戈を一一度振るえばそれだけで道が出来る。

刃で薙ぎ、鉢器で兵を潰し、いとも簡単に道が空いた。楽しそうに
戒めの戈を振るうバルドルを見ていると、貴族野郎の兵隊共があげ
立レイて

る悲鳴が空耳に思えてくる。

ドルヴァアはただ歩くだけ。バルドルの開いた道を敵の大将に向かつてゆっくりと、一步一歩、歩を進めるだけ。

「武器を取れ。守られたままいられると思うなよ、俺は貴様にムカついてんだ。」

ただ無表情に貴族に向かつているドルヴァアに、貴族は少しずつ後ずさつしていく。

普段は守られているだけだ。自分に直に刃が向けられることなんて今まで無かつたボンボンだ。当然と言えば当然の反応だが、それはあつてはならなかつた。

指揮を執る者、味方の中で頂点に立つ者の不安・恐れは味方全体でのそれだ。

一度に統率が失われる。

「もう一度言う、武器を取れ。取らないならば貴様は無抵抗のまま死ぬだけだ。」

「く、来るな。それ以上近づけば即刻首をはねてやる。」

あまりに対照的だ。朗々と唱えるドルヴァアに対し貴族の声は震えていた。同情を誘い、惨いとさえ思えてくる。腰を抜かし、息を切らし、今にも失神しそうな勢いだ。

もう、貴族を守ろうと立ちはだかる者はいない。否、立ちはだかることが無意味であると皆が理解しただけかもしけない。少なくとも、バルドルの槍は今、振るわれていない。

「助けて、くれ。金ならやる。だが……、命だけは……。」

ドルヴァは依然武器を取ろうとしない貴族の首に

剣を

奴が今居なくなると困ることがある

ただ一つだけ

飼い主は死ぬ

私が意に介することではない

私は

己のモノを

取り返さねばなるまい

「待て」

“あれ”（前書き）

遅くなりました
受験も終了しまして、復活第一号です。

“あれ”

「待て

その言葉を発したのは先程まで籠の中にいたシャンティアだった。彼女はドルヴァの振り上げた刃を素手で掴んだ。血が流れるのも厭わず・・・・・

「ガキ、クズ野郎を庇つて何になる?」

「私とてこのような輩、庇うだけで反吐がでる。・・・・・ただ、聞き出す必要がある。」

そう言つて彼女は貴族に向き直つた。

「“あれ”は何処だ。“あれ”は私のものだ。在処を吐け」先程までの何にも関心を示さない椅子に座つていただけの少女とは思えない。

「あ・・・・“あれ”とはなんだ」

刃を向けられ、既に気を失う直前の貴族野郎に聞いても返事が来るとは思えない。

多分今こいつは自分の名前を聞いても答えられないのではないかと思う。

それほどにこいつは混乱している。

「ドルヴァと言つたな。その剣、私に寄越せ」

俺の方を見ずに告げられた言葉。

用件は己の血の付いた剣を渡せというものの。

「何のために?返答によつちや断るぞ。」

納得できるわけがない。素手で剣を掴んで止めるような危なっかしいガキにこんな危ねえ^{モジ}得物渡せるわけがねえ。

「たつた今、私の中で“こやつ”的存在価値が消えた。首を切り落

とすためにそなたの剣を寄越せと言つておる。」

「命を奪うためにか？お前が？笑わせるな」

「バルドルにだつて、命を奪わせたことはない。子供には必要のない

ことだ。」

だがこいつは事も無げにそれを言つてのけた。本当に、こいつの中で貴族野郎の生存価値は〇もしくはそれ以下のマイナスにまで下がつたのであるう。先程までは己の身を挺してまで底う程に価値があつたらしいのに。

「ま・・・・・・待て、その“あれ”とやらが見つからなくてもいい・・・・・・いいのか？わ、私しかあ・・在処を知らんのだろう？」

「氣を失う直前でここまで言葉を紡げたことはほめてやれる。だが、無茶苦茶だ。」

「知つてゐるはずの貴様が知らんのだ。私がわざわざ貴様を生かす理由は消えた。生きたければ“あれ”を・・・・・在処を思いだせ。」

幼い少女は一步貴族に歩み寄つた。

手を伸ばし、素早く貴族の腰の剣を奪い取つた。

一瞬の出来事だった。

周りの誰もが反応できず、少女の手に剣がおさまり、貴族の首に当てられた瞬間に何が起つたのかを理解した。

「おまつ・・・・いつの間に？」

ドルヴィアは慌ててシャンティアの手に収まつた剣を己の剣ではじこうとする。

が、振るつたその先にシャンティアの剣は無かつた。

「邪魔をするな。こいつがいては屋敷内を自由に探せぬ。私の邪魔をすると言うなら貴様も斬るぞ」

ただ、彼女の切つ先が己の首筋に添えられていた。。

薄皮一枚分

少しでも動けば鮮血が流れるであろう距離。

「動くな！」

視界の端に見えた自分のクルーを牽制する。自分を助けようと/or>のを止めるなんて変な話だ。

けど、そうせずに居られなかつた。

初めて真っ正面から見た彼女の瞳に“俺”は映つていなかつたから。いや、俺だけではない。何も映つていない。悲しみも怒りも悲哀も映さない。ここに在るようでここには無い。全く別の世界のモノのようだ。

「兄貴？！けど・・・ツ」

バルドルの反応は至つて普通のものだ。誰だつて助けるなと言われば疑問と抵抗を口にするだろ？

「いいから、動くじやねえぞ。船長命令だ。」

それだけ言つて俺はシャンティアに視線を戻した。

「もう一度言う、邪魔をするな。私は何としてでも“あれ”を取り戻さねばならぬ。」

一瞬、悪寒に襲われた。戦場にでたものなら誰もが知つてゐる殺氣それは確かに俺を突き刺した

「今まで、私を生かしていきたことにだけは感謝してやう。だが、
“あれ”を貴様は失つた」

彼女はそれだけ言つて剣を貴族の首に振り下ろした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1095n/>

光を貴女に

2011年3月18日23時16分発行